

QOL/PRO 研究会第 3 回学術集会報告

第 3 回 QOL/PRO 研究会学術集会が、2016 年 2 月 20 日(土)、東京都六本木の東洋英和女学院大学 201 教室にて開催された。以下、各セッションの座長からの報告を掲載する。

<基調講演>

今回の大会実行委員長である鈴嶋よしみ先生より基調講演をいただいた。「QOL、何を評価するか」と題したご講演は、3 つの柱「QOL/PRO 研究会の歩み (国際的な動きの中で)」「QOL、何を測るか」、「本邦における QOL/PRO 評価課題への挑戦」で構成されていた。



まず QOL/PRO 研究会の歩みとして、2011 年 1 月発足から現在に至るまでの 5 年間の活動について触れられた。本研究会立ち上げのきっかけとなった、国際 QOL 研究学会 (ISOQOL) についても、近年の学会テーマ動向とともに会の概要が紹介された。

続いて、視覚障害に焦点をあてた「QOL、何を測るか」へと話を展開された。視覚障害の QOL は、先生ご自身の長期にわたる研究テーマである (余談であるが、スライドに挿入されていた、視覚障害児にかかわっておられた 20 代の頃の愛らしいお写真がとても印象的だった)。

視覚障害に関する QOL 評価については、視覚の質 (QOV)、生活の質、視機能、視覚の障害、視覚による活動など、様々な測定指標が存在する。Sumi Quality of Life Questionnaire、NEI VFQ-25、QOV Questionnaire など具体的な尺度を示しながら、WHO 国際生活機能分類 (ICF) と眼の障害のかかわりについて説明がなされた。

視覚障害の QOL/QOV は何を測っているのかという根本的な問いに対して、QOL は主観であることを強調した上で、「視覚によって影響を受ける患者さんのさまざまな段階・様相」という回答を提示された。

最後に、QOL/PRO 評価で課題となっているレスポンスシフトおよび最小重要差について、本研究会での取り組みが紹介された。文部科学省科学研究費 (基盤研究 B : 2015 年～2019 年度:主任研究者 鈴嶋よしみ) の助成を受けて、QOL/PRO の科学的評価手法の確立、具体的には研究・解釈のガイドライン作成を目指した調査研究が進行中である。その一環として、ISOQOL で作成されている重要資料の日本語版作成も進められている。今後の QOL/PRO 研究会有志での学術企画についても言及され、QOL/PRO 研究の発展に向けた力強いメッセージで講演を締めくくられた。(内藤 : 記)

<国際 QOL 研究学会報告>



倉敷中央病院救急科の田村暢一郎先生から、2015 年の ISOQOL 参加報告をいただいた。田村先生は救急医療を専門とする医師で、ご自身が QOL に興味を持ったきっかけから ISOQOL 初参加の印象まで、ユーモアを交えながら熱く語ってくださった。

2015 年度の大会 (22th Annual Meeting) は、カナダのバンクーバーで 10 月 21-24 日の 4 日間にわたり開催された。今回の学会テーマは、” The Matrix: Quality of Life in Social Context” (マトリックス：社会の枠組みの中での QOL) であった。

学会プログラムの丁寧な紹介に加えて、ご自身の発表 “The quality of life in trauma patients at 6 months after injury: a prospective cohort study” の質疑応答に関するエピソードは、ISOQOL での発表を検討している臨床家にとりわけ役立つものであった。Closing Dinner での楽しい思い出が写真とともに披露され、会場は大いに盛り上がった。(内藤：記)

<一般演題 1 >

一般演題 1 では、3 題の発表が行われた。まず筑波大学附属病院日立社会連携教育センター兼(株)日立製作所日立総合病院呼吸器外科の市村秀夫先生より、「呼吸器外科領域における EQ-5D-5L を用いた QOL 前向き調査—研究動機・課題と経過報告—」のご発表をいただいた。肺がんに対する手術アプローチの違いの効果を EQ-5D-5L を用いて明らかにしようとした研究で、胸腔鏡下手術よりも腋窩小開胸手術を行った方が高い効用値を示していた。周術期における EQ-5D-5L の使用の可能性を示す貴重な研究であり、単施設での研究ではあるが今後のさらなる症例の蓄積が期待される。



2 題目の演題は岡山大学の平成人先生による、「高齢乳がん患者を対象とした術後療法に関するランダム化比較試験：試験参加者と辞退者との HRQoL の比較」のご発表であった。RCT 自体は 70 歳以上の HER2 陽性乳癌を対象にしたハーセプチン単独とハーセプチン+化学療法との予後を比較したものであるが、本発表は RCT 参加群と参加辞退者 (コホート群) の比較であった。アウトカムには FACT-G、HADS、EQ-5D、PGC Morale Scale などが用いられた。PGC Morale Scale においてのみ、RCT 参加群で有意に高い結果を示した。RCT への参加の有無に関する QOL 評価研究であり、RCT への参加自体は患者の QOL を低下させるものではないことが示された。

3 題目は、聖心女子大学の柴田玲子先生による、「子どもの QOL とその背景要因に関する検討 –KINDLRQOL 尺度による日独比較における中間報告–」と題してご発表をいただきました。小学校 3・4 年生を対象に Kid-KINDLR を用いて QOL を調べ、とくに自尊感情の差を日本とドイツの子どもで比較した。日本の子どもにはさらに自己主張尺度および他者配慮尺度によって自尊感情を検討した。民族の価値観の違いと共に、研究のセッティングや環境の違いについて活発な議論が展開された。(能登：記)



<一般演題 2>

一般演題 1 では 2 演題の発表が行われた。



岩谷胤生先生（聖マリアンナ医科大学、乳腺・内分泌外科）からは、「乳癌領域における健康関連 QOL データベースの構築」と題した発表があった。乳癌治療の費用対効果分析に必要な健康関連 QOL のデータは国外のものにたよらざるを得ない現状がある。岩谷先生はこれらの打開のため、聖マリアンナ医科大学に通院中の乳がん患者を対象とした大規模横断研究により、様々な状態にある乳がん患者の QOL データベースの構築を計画しており、膨大な情報のマネージメントが課題であると報告された。

錦織達人先生（京都大学大学院医学研究科消化管外科）からは、「U 領域胃癌に対する腹腔鏡下噴門側胃切除が術後体重減少と術後 QOL に与える影響」と題した発表があった。錦織先生は、噴門側胃癌に対する噴門側胃切除では、消化液の逆流による術後の食道炎が問題であったが、吻合部に逆流防止機構を設けることにより、これらの症状を軽減し、術後の QOL を改善できているのではないかと考えた。しかし錦織先生は、これまで新しい手術方法の有効性の評価が、必ずしも十分でなかったと認識し、過去の手術例を対象として質問紙票を用いた横断研究を実施した。逆流防止機構を伴う腹腔鏡下噴門側胃切除例は、腹腔鏡下胃全摘施行例と比較して、逆流症状と術後体重減少を抑制し、QOL に優れた術式であることが示された。(平：記)



<特別講演>



医療技術評価 (HTA) に関するわが国の第一人者である池田俊也先生から「医療技術評価 (HTA) における QOL 評価の意義と課題」と題して特別講演をいただいた。

HTA の中で特に重要となる費用対効果分析における代表的な指標である Quality-adjusted Life Year (QALY) の考え方、そこ

で **quality weight** として用いられる効用値の様々な測定法、そして、中でも効用値の間接測定法である **EQ-5D** の、最近開発された改訂版である **EQ-5D-5L** の日本語版のスコアリングアルゴリズムの作成過程について詳しい説明があった。

次に、海外の **HTA** 評価機関、特に英国の **NICE**、カナダの **CADTH**、オーストラリアの **PBAC**、フランスの **HA** などの実態について説明があった。

さらに、日本における費用対効果分析を用いた医療政策意志決定の最近の動き（2006年4月より試行的導入）の経緯について紹介があり、その過程で開発されたガイドラインの解説、中でも今回の講演のタイトルに関係が深い話題として、プロフィール型 **QOL** 尺度からマッピング法を用いて効用値を算出する様々な試みや課題についての解説をしていただいた。

短時間であったが非常に多岐にわたる、また深い内容の話であり、**QOL/PRO** 研究会の会員の知的興味を大変刺激して下さる内容であった。また、ぜひもう一度機会をもって、さらにじっくりとお話をお伺いしたいものである。（下妻：記）

第3回学術集会は、ご参加くださった方々の熱意に支えられ、演者、聴衆が一体になって **QOL/PRO** 研究の課題を考える、充実した会であった。改めて参加の皆様に感謝する。

